

浜松中納言物語の方法

—唐后から吉野の姫君へ—

伊 井 春 樹

要 旨 中納言の渡唐は、転生した父への思慕の情に起因しており、その思いが母を捨て、大君と離別してまで、命を賭した海彼への航海へと彼を駆り立てたのであった。ところが親子の対面以後は急速に父への関心が薄れ、帰国してからは回想されることもない。第三皇子にしても、唐后に対してみせた、とても七、八歳の童児とは思えない超現実的な言動の後には、平凡な一人の御子にしかすぎない描写に終っている。父との再会は、中納言と唐后を結びつけるために作爲されたのであり、それが果たされると、作者は次のモチーフへと筆を進めて行く。三の御子に限らず、唐后から吉野の姫君の登場にいたるまで、中納言の運命はあらかじめ構築された物語の枠組みのもとに操られるのである。登場人物の思考による内発的な物語の展開ではなく、主題性を先行させ、規定のレールを走らせるところに、作者の方法が読みとれるであろうし、平安末期物語に共通する限界でもあったと言えそうである。

一 中納言の渡唐

渡唐という行為が、当時いかに危険をとまなうものであったかは、想像するに難くない。遣唐使の一人に選ばれた俊蔭と両親の別れの場面に、「ちゝはゝはかなしむことさらにたとふべきかなし。一生にひとりある子なり、かた身のざえ人にすぐれたり、あしたにみてゆふべのをそなはるほどだに紅のなみだをおとすに、はるかなるほどにあひむむことのかたきみちにいでたつ、ちゝはゝとしかけ、かなしびおもひやるべし」(『宇津保物語』俊蔭、前田家本)と叙述される悲痛な叫びは、そのまま人々の航海への絶対的な不信の表明を意味していると言えよう。生きてふたたびこの世では会えないかも知れない親子の別離の思いを、作者は「かなしびおもひやるべし」と強い調子で物語の世界へ介入して、読者に訴えかけているのだ。

浜松の中納言とて、いつ海の藻屑と消え果てるとも知れない渡唐ではあったが、その不安を打ち砕いてまでも彼の決断を促したのは、三の御子に転生した父との再会を期する強い思慕の情にほかならなかった。父に会いたい、その一念が彼をして遙かなる海を隔てた異郷への旅路に赴かせたのである。中納言の「孝養の心ざし」の深さにより、さしもの荒びる海神も心うたれたのか、「あらし波風にもあはず思ふかたの風」すら吹いて、一行は難波することなく唐土へとたどり着いたのだ。このようにして、現存本の巻一は渡唐後の中納言の姿に照準を定め、運命的な唐后との逢瀬に向かって物語られていくことになる。

御朶七八ばかりにて、うつくしうて、うるはしく鬢づら結ひしやうぞきておはす。ありし御面影にはおはせねど、あはれに「さぞかし」と見奉るに、涙もこぼるゝ心地し給。御子も御気色かはりて、大かたのことども仰せ

られて、詞にはの給はで、昔を忘れぬに、かく逢ひ見つるよしのあはれを書きて給はせたるに、いみじう念ずれど涙とまらず。（巻一・一五六、古典文学大系本による。以下同じ）

右は中納言が、母后とともに「かうやうけん」に住む三の御子を尋ねて、親子の対面をした場面である。転生の事実は秘さなければならなかったのか、互に名告らぬまま、顔を見合わすことによって、父を慕い、子を思う情を二人は交しているのだ。かつてともにすごした父が、今は中納言の目の前に「ありし御面影」ではない七つ八つの童児の姿としてすわっているという設定は、新奇な方法とは言えようが、読む者に何かデカダンス的な不健康さを覚えさせずにはおかない。仏教における転生思想をモチーフに用いたにせよ、そこには源氏物語以後進まざるを得なかった、読者を場面の珍らしさと筋の展開に引き込む、物語の方向を如実に示しているようにすら思える。

中納言はあこがれ続けた三の御子を見るなり、当然のことながらそこには脳裏に刻まれた面影とは似ても似つかぬ父の姿を認めた。御子は七、八歳と紹介されるので、式部卿宮として日本に生存していたのは、すくなくとも九年以前のことでなければならぬ。一方中納言は、帰国後のこと、皇女降嫁の話を聞くと女房を通じて、

もろこしにてかしこかりし相人どもの、「廿四五六過さんことなん、いみじうかたげなり」とあまた言ひしおりに、（中略）いみじう物心ほそうおぼえ侍れば、三四年がほどは、をこなひより外のことなくて心みん。そのほど過ぎなば、世にあるべきと思ひしづまりて、そのおりに、ともかくも身をば思ひ定めんと思ひ侍りつゝ、

（巻四・三三七）

と帝に奏上しているのが、彼の唯一の年齢の手がかりと言える。唐の相人によって、彼は二十四、五、六歳を過ぎるまでの命の保証はおぼつかないと判断されたため、ここ三、四、五年ばかりは仏道の修行に明け暮れたいというのだ。差し引きすれば、彼は現在二十一歳ということになり、三年前の渡唐した折は十八歳であったことになる。ここ

での彼の発言には、多分に帝の降嫁の申し出を拒否しようとする場当りのな逃げ口上の気がしなくてもないし、現に大式女との交情には、「をこなひより外のことなくて心みん」といったことばなどむなしの響きがある。帝もそれを耳にして真剣に彼の命のあやうさを心配するという体ではなく、むしろ尼姫君の存在ゆえに皇女を迎え入れようとする心をも持たない中納言の律義さに、あきれてすらいののだ。彼が唐の人相見たちによる判断を口実にして、降嫁の辞退を申し出したことぐらひは、帝とて百も承知していたはずだ。中納言も「をこなひより外のこと」と言いながら、そのことばと現実とが、いかに乖離しているかは、唐后への思慕にさいなまれる身にとって、痛感していないはずはない。

唐における相人の予言の存否はともかくとして、彼の述べた年齢関係に偽りはなからう。十八歳の中納言と、父の転生した七、八歳の三の御子、二人は過去の鮮明に刻まれた記憶を反芻しながら、親子と名告れぬもどかしさを覚えて対座していたに違いない。式部卿宮の死を一応九年前とすると、中納言はその折わずかに九歳であった。⁽¹²⁾ 少年期に最愛の父との死別を味わった中納言にとって、赴くところは漠然とした世の無常と厭世、さらにはその先の仏道への志向であった。そのことが彼に若者らしからぬ老成した雰囲気を醸させ、明るさのない沈鬱とした人間造型をもたらす結果となったのだ。というよりも、源氏物語以降の主人公の要件は、薫的性格を保持しておくことが不可避であったのであり、それから脱却して新しい独自の行動を展開するようになるには、鎌倉期の物語まで待たなければならなかった。中納言も観念的な思考によるとはいえ、早くから現世を出離する望みを抱き、世の貴公子たちと同じ道を歩む将来の姿など想像もしていなかった。だが彼を待ち受けていたのは、尼姫君と唐后に永遠に結ばれ得ぬ思慕を続けるという、理想とはおよそかけ離れた運命に翻弄され、そして懊惱する過酷な現実であった。中納言はつくづく、「すべてをむかし思ひし事ども皆違ひぬる我身」(巻二・二二五)を思い、「この世を思離るゝ心ふかうて、人に似

ぬひが物にてすごし」（同・二三二）てきたそれまでの生活のむなしさを覚えずにはいられなかった。「われは例の人にて世にあらんとや思し」（同・二五五）と述懐するように、渡唐前の中納言は、ひたすら亡き父を慕い続けて憂愁さをたたえ、私の教えにすがろうとするまめな男として描かれていたはずである。

中納言が父を求める心は、そのまま父が子をいとしく思う心と表裏をなしている。「たゞひとり侍しかば、たゞひなくかなしく思ひ侍しにより、九品の望みもこの思ひにひかされて、かくむまれまうできたるとなんおぼえ侍」（巻一・一六五）と記されるように、式部卿宮は九品の望みよりも強く現世の親子の情に引かれて、日本と唐という空間的な隔たりはあるものの、ふたたび地上の人間として生をうける運命が賦与されたのだ。そこには、蓮華の花咲く世界を絶対としない、むしろ現世での人間愛を信じようとする作者の思考が反映されているのかも知れない。

中納言は、父の死後その思い出を暖め続けていた心が神仏に通じたのか、三の御子に転生している事実を知ることができた。無名草子には「父宮の唐上もつての親王に生まれたる夢見たるあかつき」「式部卿宮唐土の親王に生まれたまへるを伝へ聞き、夢にも見て、中納言唐へわたるまではめでたし」と物語の散逸部分が語られているように、彼は父の転生という奇跡を人から伝え聞き、さらに夢による啓示でもある夜もたらされたのである。この三の御子の噂を伝えた人物について、石川徹氏は吉野の尼君や姫君を後見した聖であろうとし、唐から帰国して後その口から出たことばが、風の便りに中納言の耳に達したのではないかとされる。しかし、それだけでは信じかねていた折、彼の夢に父の霊が現われることによって、渡唐の決意を定めたと解釈する。⁽³⁾ 聖とすれば、唐后から母尼への文を託されたばかりではなく、三の御子からも出生の秘密を打ち明けられるという、後半の吉野の地での役割とともに、空白部分でも重要な任務を荷った人物として設定されていたことになる。

だが、物語内部の論理によると、転生は秘さなければならなかった。中納言の母にすらも、夫の姿を変えた再誕は

知らされていない。それほど秘密事を、吉野の聖が中納言に直接伝えることなく、他の人物を介したとは考えられないし、ましてや風聞として中納言の耳に達していたとすれば、それを人前で口にした聖は不謹慎のそしりを免れない。吉野の奥まで尋ねた中納言に、聖は尼君の数奇な運命のこと、唐後の出生のことなど残りなく語ったものの、三の御子に関しては一言も口にしていない。唐後の噂以上に、三の御子の存在は二人に共通の話題となるはずであり、さらに聖自身にとっては父の転生を中納言に伝えるべき責務をまだ果たしていないのだ。このように考えてくると、中納言が「伝へ聞」いたという相手を吉野の聖と想定するのは、やや無理であろう。今、私にはそれ以外の有効な解釈があるわけではないが、どうしても聖では不相当とすれば、さしむき三の御子から特に任命を受けた留学僧などが穏当なところではなからうか。

三の御子が母の唐後に自己の出生の秘密を明かしたことばの中に、「中納言も『かくなん侍』と伝へきゝて」と、人伝てのあったことを知っている。「九品の望み」をあえて拒否し、中納言というほだしに引かれて再誕した事実を、三の御子の口から発する以外、ほかの誰が知ることがあるうか。本来ならば、転生してほだなく夢によって知られるというのがよいのであろうが、それでは中納言はまだ渡唐できる年齢ではないし、よしんば会ったところで御子とは話もできないし、唐后との関係なども起るはずがない。唐后は五歳の折渡唐、十四歳で入内、十六歳で御子出産、立后、そして中納言と出会ったのが二十三、四歳である。御子も七、八歳としたのは、幼年期を過ぎ、わが国の慣例であれば七歳の読書初めを経たあたりまで成長させておくことにより、一応の思慮分別を持たせて親子の再会をさせようとしたのであろう。

三の御子は、信頼のおける留学僧を召し寄せ、自己の秘密を打ち明け、父を慕い世を厭って仏道に志向する中納言に、転生の事実を伝えさせた。それだけではなく、中納言の孝養に感応した仏は、彼の夢に現われ、父の存在を告げ

たのではなかったか。二つの知らせを受けた彼は、もういたたまれぬ思いで渡唐の機会を待ったことであろう。このようにして、二人は仏の加護を背景にした目に見えぬ運命の絆により、唐を舞台にして九年ぶりに再会することになったのである。

二 唐后との出会い

中納言の渡唐は、ただひたすら父への慕情に起因しており、その思いが三年という期限とは言え、母を捨て、大君と離別してまで、命を賭した海彼への航海へと彼を駆り立てたのであった。風葉集に贈答歌が残されているように、公的には式部卿宮との別れの管絃が宮中で催されていたようだが、首部の散逸部分にはほかにも母や大君との悲涙をしぼる出立の場面が、情趣深く展開していたに違いない。⁽⁴⁾ それらの係累を断ち切ってまで、彼には三の御子に会う必要があった。というよりも、背後であやつる仏の力によって、彼の身は唐国へと吸引されたと言ってもよいであろう。

中納言と待望の対面をした後のある日のこと、三の御子はしみじみと母后に自己の出生の秘密を告白する。その中で、中納言は前世の我が子であったこと、子供への愛惜故に転生したことなどを語ったあと、

おほやけも限りなくおしみ、母も命絶ゆばかり悲しみけれど、なをふりすて、三年が暇を申て渡りまうできた
るなり。（卷一・一六五）

とも述べる。二人の対面したシーンでは、親子の感情をあらわに示して、前世の回顧談や、再婚した北の方など話題にのぼらず、もっぱら「かく逢ひ見つるよしのあはれを書」き、「雲の浪烟の浪と、はるかに尋ねわたりて、生を隔

て、かたちをかへ給つれど、あはれになつかしくふるさとを恋ふる心も、たちまちに忘れぬる心」を文に作つての、心と心の対話であつた。人に聞かれるのを恐れたのであろう、ことばに出して語りあうのを避け、いわば筆談による生を隔てた二人の再会が、「人目には、その事とおぼえ顔にもかけ」ることなく進められたのである。父にとつても、子にとつても、九年余の空白の間のさまざまなきごとを、心の底から訴え、涙をも流したかつたであらうが、互に複雑な胸中を目で見取り、心で感じ取るしか方途がなかつた。

このような親子の出会いであつたにもかかわらず、三の御子の中納言の出立に際して帝の惜別の情や、母の命も絶えるばかりの悲しみのあつたこと、やつと三年の暇を下賜されたことなどを母后に語っているのだ。いつの間にか納言は、三の御子にこまごまと説明していたのであろうか。本文に書かれていないというだけではなく、二人の対面した状況からみて、右のような渡唐にいたる事情が話されていた可能性はまずあり得ない。そう考えてくると、「三年が暇を申て渡りまうできたるなり」と断定する三の御子のことばには、中納言の報告を聞いた上で唐后に伝えたという体ではなく、直接話法の文脈からしても、そこには自己の体験を語つた響きがある。

三の御子は、中納言の人々との別れの場面を、身は唐にありながら魂が飛翔してつぶさに見聞きしたのか、あるいは超自然的な透視力をそなえていて知悉していたのであろうか。いづれにしても、御子の中納言から出立に際しての帝や母の動揺を耳にしたのではなく、すでに経験済みのことであつたために引用したような表現になつたものと考えられる。御子はこの世に存在しながらも、実際は前の世の人であり、しかも式部卿宮としてすごした生涯を自覚している。前世の体験を持ちながらも、この世を生きていくという不可思議な人物なのだ。更級日記には、「ひじり(聖)などすら、前の世のこと夢に見るは、いとかたかなるを」と記して、孝標女が前世においては、清水の御堂に安置する丈六の仏像を造つた僧だつたと告げられる奇特な夢を見たことを述べている。自己の前世の姿は、はじめから自覚

しているというのではなく、夢などによって断片的に与えられるものであった。高德の僧であっても、それを知ることとはきわめて稀だったし、ましてや衆生にとつては、たとえ転生していてもその事実すら知らないで終わってしまったであろう。

三の御子は二つの世界に出現し、しかも前世のわが生涯と運命を、この世に刻みつけて生きていくという神仙的存在である。だからこそ、中納言の身边に起った事柄など、御子はたやすく知り得る立場にあったと想像できる。そうすると中納言の渡唐も、表面的には親への恋しさによる決行という体裁をとりながらも、内実はもうすこし深い意味あいのあることを考えなければならぬし、御子の設定にもその必然さの意義をあらためて思量する必要がある。くる。あるいは、御子は中納言を唐上と呼び寄せるために造型された仏の化身であったのかも知れないのだ。

中納言は、父の転生を人から伝え聞き、さらに夢にまで見た折、もう矢もたてもたまらず、ただ父との邂逅を求めて海をも渡った。ところが、帰国して後になると、もはや父への思慕の情は冷めてしまったかのように少しも語られず、もっぱら唐后との逢瀬のことが彼の心を奪ってしまうのだ。まるで渡唐と対面という儀礼が終ると、作者の念頭からは父の存在がきれいさっぱりに消滅してしまったのかと思いたくなるほどである。三の御子にしても、母后に対する自己の運命の開陳と中納言の紹介という場面で見せた、とても七、八歳の童児とは思えない稠密で緊迫したことを吐き出して後は、平凡な一人の御子にしかすぎない描写に終わっている。さらに、あれほど父の転生については母にすら固く口を噤んでいたにもかかわらず、最終の巻にいたって、中納言はなんのためらいもなく式部卿宮に知らせているのだ。吉野の姫君を盗み出した式部卿宮が、中納言にその素姓を詰問した折、彼は咄嗟の取り繕いとして、

唐の親王のこの世の事をかゞみの見んやうにの給しなかに、「上野のみこと言ひし人のむすめにいみじうしのびて行通ふやうありしほどに、はかなう形見とゞめてき。女にてぞあらん。いとけなきほどをあはれと見し程に、

我をうらむる心ありて、行衛もしらず、母君かくれしかば、いまたび見ずなりにしを、身をかへてのち、よにもあはれに心くるしうおぼゆるを、我をわすれず、哀とおもはゞ、かの人をたづねて、世ただにあらば、かならず尋て知れ」となん侍りしかば、(巻五・四一六)

と語って、吉野の姫君と自分の関係の緊密なことを強調する。もちろんここに示される内容は、すべて彼の創作なのだ、ただ三の御子がこの世(日本)のことを「かゞみを見んやうにの給し」とする発言には、さきほどの考察ともあいまって注目する必要がある。

唐の親王(三の御子)が、前世においては式部卿宮であった頃、密かに上野親王の姫君に通って一人の女の子を儲けていた。ところが通いのと切れがちなのを恨んでのことであろうか、親子とも行方をくらし、遂にその姿を見つげ出すことができなかった。式部卿宮は生を隔てて、今は唐の親王となってしまうものの、どうしても生まれてきた姫君のことが忘れられないため、渡唐して来た中納言にその消息を尋ね出すよう求めたというのだ。ここで彼はこともなげに、さも既知の事実を語るように「身をかへてのち」と父の転生を口にする。式部卿宮はそれを聞いて、唐の親王については何ら関心を示さないのを見ると、驚くほどでもないニュースだったのであるか。当面の話題は吉野の姫君であり、今さら話のついでに触れた転生のことなど追究する必要もないと作者は判断して、その問題は無視したとも考えられよう。冒頭部における中納言の渡唐が、転生した父に会いに行くのだとする認識が、人々に周知であったことはあり得ない。

これまでいくつか取りあげたように、場面場面でのモチーフに使用し終えた事柄は、全体的な物語の流れには留意しているであろうが、作者は急速に関心の度合いを薄めていく。中納言の父への思慕も、渡唐という機縁を起こさせるための作爲であったのであり、それが用済みになると、ふたたび取りあげようとしめない。三の御子の大人びた

言動もそうであって、彼に与えられていたのは、父の死後中納言の慕い続けた心の慰謝と、唐后への橋渡しがその主要なる役割であったのだ。不用意に式部卿宮に語られた父の転生にしても、吉野の姫君の偽りの系図作製のために引合いに出されたにすぎなく、巻一であればほど深刻に転生そのものが中納言の内面の問題として秘されていたのとは、かなり異なった様相を示している。このように作者の物語の方法は、ただひたすらあらかじめ敷かれたレールの上を先へ先へと走らせることであった。

故式部卿宮が唐后の腹に第三皇子として生まれたこと、それはとりもなおさず亡き父を慕い続け、仏道にまで心を寄せる青年に成長していた中納言を、唐に呼び寄せる物語創作の意図が背景に存したからである。中納言の渡唐の目的は、転生した父に会うためであった。しかし、姿を変えてしまった父と会って何を語ろうとするのか、何のために会う必要があるのか、中納言の心の内は物語に書かれてはいない。散逸部分で、彼の渡唐にいたる必然性は記されていたのかも知れないが、それにしても在唐中の二年二カ月余、三の御子と対面してどれほど父の死後の悲しみの情が癒されたというのであろうか。一度の緊迫した二人の場面が描写されて以後は、帰国して父への思慕が語られなくなつたと同じように、作者は三の御子と中納言を親子として取りあげること急に無関心になつてしまふ。唐后との悲涙を催す別離の情は起つても、ふたたび会うことのない父であるはずの三の御子には、そのような感情の表現が一切示されないのだ。

作者は中納言を父との再会という目的のもとに渡唐させながら、その背後にはすでに唐后との出会いを予定していた。唐后が第三皇子を我が子として持ったことは、即ち中納言を日本から呼び寄せることでもあったのである。親子の対面という所期の目的が果たされると、その裏に隠されていた別のテーマが表になって語り進められていく。と同時に、その背後にはすでにまた新しいテーマが用意されるという、連続した物語の方法を作者はとっているのだ。唐

后との出会いが、やがて中納言の前に吉野の姫君を登場させる機縁となり、さらに式部卿宮に引き渡していくといった、どれ一つとて取りはずすことのできない強固な物語の構築がなされているのである。

三 唐后から吉野の姫君へ

渡唐して三カ月余り経た十月二日の夕暮、中納言は「かうやうくゑん」に退出した三の御子を訪れた折、琴の音に誘われてふと唐后をかいまみてしまう。それは中納言にとって、また唐后にとつても、あまりにも運命的な出会いであった。在唐中の中納言をとりこにしたもっぱらの関心事は、父の転生した三の御子でも、日本に残した大君でもなく、ひたらず物に憑かれたように「かうやうくゑんの后、今一度見たてまつらん」との思いであり、それが彼の心を占めるにいたるのである。中納言は自分の心を御しかね、靈験を示すという菩提寺に祈念のために足を運ぶのであった。すると夢に「いみじうけうらに、たうとげに装束き」た僧が現われ、「今一めよそにやはみんなこの世にはさすがに深き中のちぎりぞ」と歌を詠じて、彼のこれから起るべき運命を予示するのである。

同じ頃、唐后にも運命的なさとしがあった。参内しようとする、「心たがひ、消え入る癖」がつくというありさまで、陰陽師のすすめにより、彼女は「さんいふ」の地にしばらく退いてかたき物忌みをするようになったのである。「内裏のほど一日ばかり」離れた土地、しかも「親しき人三四人ばかり」という人少なさ、まるで中納言との出会いをことさら設けるために陰陽師の仕組んだようにすら考えられなくもない。彼女の突発的に起る病は、明らかに参内を阻止するための便法であり、物忌みとの名をかりての「さんいふ」行きは、二人の密会の場を作為したものであることは、あまりにも見えずいていであろう。陰陽師ともあろう者が、物忌みと判断したにしても、都から離れ

た土地に赴けば、唐後の運命に重大な結果をもたらすことぐらい予測できなかったのであろうか。病をおして参内するなり都にとどまることが、どのような危険を彼女にもたらすものなのか、読む者にその必然性が理解できないし、また一向に切迫感も伝わってこない。作者の念頭には唐后と中納言の出会いが先行し、その事件にいたる背景として、夢による啓示と、物忌みを組み合わせる運命的な結びつきを強調しようとしたのだろうが、かえって作為が露呈してしまった憾みがある。

春の夜の月明りのもと、中納言は琵琶の音に引かれて「山のふもとなる家」をのぞき見たところ、そこに「かうやうくゑんの后」を髣髴させる一人の女性の姿を見いだした。菊の花の華麗に咲きほこる夕べに一目見て以来、彼の胸奥は唐后へのあこがれに平静を失ない、靈験を求めて寺に参詣するという執着だっただけに、自制の心を持ついとまもなく、「似たてまつる人」の寝所にその夜忍び入ってしまった。后の方は、あさましく思いながらも、すぐさま男が中納言と知ったというのだから、彼の来るのをあるいは予期していたのではないかと思いたくもなってくる。唐后は中納言との逢瀬の後、

「思ひかけず、さるべき契りにてこそあらめ。今はいかゞはせん。いかにして、我とだに知らせで止みなん」とおぼしつゞくれば、身づからもおぼしきはぐ気色も見せ給はず。(巻一・一七八)

といった諦念を心内でつぶやくが、そのことばには驚きも悲しみも読みとれない、きわめて冷静な、むしろ一つの任務を終えた安堵の響きすら聞こえてくる。光源氏と密会した藤壺中宮の苦悩はそこにはなく、宿世としての中納言との結びつきを至極当然のこととして自分自身に納得させようとする。だが、唐后が中納言との出会いをすぐさま「さるべき契り」と諦め、むしろその後の処置の方法に頭を切り換えて画策しようとする姿を見るにつけ、私は違和感を覚えずにはいられない。

中納言は、唐后に酷似した見知らぬ女性のもとから立ち去る折、一時の別れの悲しみに耐えられず「我よにもまだ知らざりしかか月のかゝる別れにまどひぬる哉」と歌を詠むとともに、涙ながらに「さるべき人／＼をきて、我ながら怪しう夢の心地し侍を、たゞ一所の御契りに引かれてこそ侍りけれ」（巻一・一七九）と訴えかける。彼は自分が日本人であること、親や最愛の女性を置いて、苦しい思いで渡唐したことなどで縷々と説明したのであるか。中納言にとつて、この別れの間で真情を吐露して愛を告白する相手の女性は、未知なのではなく、想念で思い焦がれ続けた唐后の姿に、いつの間にか変貌していたのである。それは、現実には置かれた二人の立場でもあった。彼はその女性で自分にとってどのような存在であるのか、衝動にかられるように人々の慰留をも振り切つて渡唐した運命が、ここではじめて理解できた。「たゞ一所の御契り」を成就せんがために、これまでのいくたの受難が彼を襲つていたのである。中納言は転生した父の姿を一目なりとも見ようと渡唐したはずだったが、ここにいたつて、真の目的は唐后との契りにあったのであり、その見えざる宿世の力によつて彼は海を渡つたことが、登場人物の口をかりて明らかにされる。中納言は父に会おうと重大な決意をし、悲歎にくれる人々に別れを告げて日本を離れたと思つた積極的な行為が、はからずも運命の糸に操られて動かされていたにすぎなかつたのだ。すると父の死、それに続く三の御子としての転生も、彼を唐后と結びつけるための宿世のなせるわざにはかならなかつたことになる。どれ一つ欠けても、この物語は先へとは進めなくなる構造を持つていたのである。

唐后にとつては、中納言との契りは避けることのできない、物語の本質から規制されていることがらだつた。そのモチーフがまず案出された後、二人の出会い場面をドラマティックに作者は脚色していったのである。だから、陰陽師が「おどろ／＼しう」占ない、物忌みのために所を去らせたにもかかわらず、唐后には中納言との密会が生じてしまったと、物語内の論理を追つて批難したところで、今さらはじまらないであろう。陰陽師は、いわば狂言回しとし

て登場していたにすぎなく、唐後の「さんいふ」行きが実現すれば、彼の役割はそれで充分だった。

唐後は、中納言との逢瀬によって懐妊する。物忌みに先立って、彼女に「ゑもいはずいみじきさとし」があったというのは、この事実を示していたのであろう。物語において、密通をも含めた秘められた契りには、必ずと言ってよいほど懐妊・出産という難題が描かれる。それがあってこそ、物語は緊迫してくるし、その処理をめぐって新たな創作の発条ともなり得るのである。唐後は、藤壺中宮が光源氏との密通による冷泉院を桐壺帝の子と捏造したように、御門との間に儲けた子供として認知させる手だてもあったに違いない。ところがここで突如として、「御門にはおとこ皇子三人よりほかおはしますまじ」と宿曜師たちのことばがすでに公表されていた事実が紹介され、それ以上の御子の出現はあり得ないとする規制が設けられる。唐の地において、やがて生まれ出づるであろう第四の御子の占めるべき位置は予定されていないのだ。中納言との密通の子は、唐後の運命とは全く逆に、唐から日本に渡った後、成長して要職に就くことが作者の念頭では考えられていたのであろう。むしろ主流となる日本での物語に、世にあげられ理想的な貴公子として活躍させることを意図し、唐を去らせる理由に宿曜師の予言が引きあいに出されたにすぎない。源氏物語での「宿曜に、御子三人、帝、后必ず並びて生まれ給ふべし」(濤標)といったことばをここに応用したのであろうが、予言の三人という数に秘められた物語の構想の重みは浜松中納言物語になく、ともかく日本に渡らせることだけを目的とした安易な用い方とも言える。

このように、作者はあらかじめ物語の大枠としての構造を定めておき、内容的なディテールはその都度案出していくという方法をとったようである。密通の子の日本行きも、日本での物語に必要としたからこそ、それを必至たらしめるために、唐突ながら「皇子三人よりほかにおはしますまじ」との予言を持ち出したにすぎなく、そのことばのそれ以上の物語における進展は一切考慮されていない。一つ一つのことばの影響を慎重におしはかりながら物語を進め

ていくというのではなく、局面の展開に次々と思いつく予言や夢による啓示を与え、プラン通りにひた走りに走っていく。その場面転換の必然性と、トータルとしての物語の流れに、先ほど違和感を覚えると述べたように、どうしてもギャップを生じてしまうのだ。

中納言は帰国間近になって、「さんいふ」で一夜の契りを交した女性が唐后であり、若君まで生まれていることを知った。二つにおよずけた我が子を目の前にして、中納言は、

我ながらも、「心つよく思ひたつかな」と思ふ道を、「このちぎりにひかれけるにこそ」と、搔きくらしつゝ、
さま／＼思ひつゝけらるゝ、(巻一・二〇三)

と、感慨深くきし方行く先を思わずにはいられなかった。「心つよく思ひたつ」と語られているように、風葉集や無名草子、さらに断片的な本文の記述などから、渡唐に際しては悲痛な離別の場面が繰り返し描かれていたことが分かっている。中納言は父との再会を心に堅く秘めながらも、当面の母や大君との別れにはさしもの決意も鈍る思いがしたに違いない。それをも彼は振り切つて、まるで信じられないような心の強さを発揮した。あたかも渡唐すること、彼の人生史にすでに刻まれた運命のように、日本を離れたのである。もうすこし正確な表現をすれば、自分の意思と決断によって海を渡つたと見えた行為は、あらかじめ仕組まれた運命のなせるわざだったのであり、そういう意味では中納言は唐へ連れて行かれたのだと言ってもよいであろう。彼が自分の運命を凝視したのは、春の夜の女性(唐后)と出会った時の、「たゞ一所の御契りに引かれてこそ」のことばであった。渡唐の意義が三の御子から唐后との契りに移されていたのだが、今ここで再転して若君の出現に自分の宿世が支配されていたことを認識する。その運命の変質は、そのまま作者の想念に描いた物語の構造の節目に相当するものと推察される。

中納言は、唐后から託された沈の文箱と、密通による若君を連れて帰国の途につく。唐から持たらせさせるこの手紙

と人物は、日本における新たな物語展開の原動力となることを予想させる。若君は母后から乳のかわりにと与えられた菓を口に含むと、船中すこしも瘦せ劣えることもなく、むしろ光をますばかりで、「あさましく変化へんげのものゝやうに清らか」ですらあったという。この「変化のもの」とも呼ばれる若君であつてみれば、唐后に「これはこの世の人にてあるべからず。日本のかためなり」と夢告のあつたことを知らないまでも、将来の世の柱石と人並はずれた栄花の訪れは必定と、誰しもその成長を楽しみにするに違いない。それは中納言一家の繁栄をも約束したことになるのだが、作者の構想の筆はそこまで書き進めることをしなかった。

沈の文箱に納められた文の方は、中納言の日本におけるその後の行動を、ダイレクトに規制していくことになる。唐后の母を探すが、吉野の姫君を物語に登場させる機縁となるのであり、それはまた大君（尼姫君）・唐后に継ぐ恋物語の葛藤を呼び起すことにもつながってくる。唐后との出会いがあつてこそ、吉野の姫君と中納言の物語も展開できるのであり、さらにさかのほれば、父の転生がその前提になつていふという、切れ目のない構造がこの作品には強固に組み立てられているのである。

四 中納言の運命とその展開

中納言は帰国して都に落ち着いて後、唐后から預かった文を広げて見、そこに「ものゝたぐひ」（妹君）の存在していることを知る。このことに関して池田利夫氏は、巻一ではその片鱗すら窺えないことから、作者の念頭には初め吉野の姫君は予定されておらず、中納言は大内山の尼母宮を訪れ、その返書を持って唐土へ渡り、再度后と会う筋書きを考へていたのではないかとされる⁵⁾。しかし、ふたたび渡唐して后に会つたところで、話の展開はどのように進んで

いくものと予測すればよいのか、またどのように結着をつけようとしていたのか、これだけでは判断の下しようがない。中納言は唐后と対面したとしても、かつてのものまぎれのような逢瀬は二度とあり得ないだろうし、もしそのような場面を描こうとしていたとすれば、二番せんに興味は半減してしまうだろう。もはや物語は、それ以上の進展を見せることなく終焉に向かわざるを得ない。

作者の物語創作の本質的なエネルギーは、運命論を根底に置いた人間観にあり、無限に繰り返す人の世の姿をむなしいながらも追い求めることにあった。中納言が唐の母君に文箱を渡す任務を帯びたこと、それは新しいゆかりの登場を呼び起こし、ふたたび恋による憂き身をやつさざるを得ない状況の設定が背後に意図されていたものと、巻の内容容から私は考えたい。それとともに、彼が吉野に足を踏み入れるのは、母尼君を探しての自律的な行動と見なされる体裁をとりながらも、その内実はこれまで述べてきたように、渡唐以来続く避けることのできない宿命でもあった。

唐后の異兄妹にあたる吉野の姫君は、後世の菩提を望む母尼君の身にとっては、本来的に不必要な存在であった。彼女が生まれていなければ、尼君は山の奥にも籠って心おきなく仏道に専心し、証果を得て往生することも果せなくはない。母尼君は五歳の唐后と離別した後、大式となって下っていた叔父兵衛督に連れられて上京し、やがて思いがけなくも帥の宮と契る仲となってしまう。我が身のうとましさに、彼女は髪を削ぎ身を隠したものの、その時にはすでに帥の宮の子を宿していたのだ。やがて尼君は女宮を生み、そのまま吉野の聖のもとに身を寄せて、ひたすら修行者としての生活に入ったのである。だからとましいとは言え、清らに成長していく我が子を尼君は目の前にして捨て去ることもできず、今はただ勤行のあい間には琴の手を教えるなど、幸せな姫君の生活の訪れを祈らずにはいられなかった。唐后の姿をも偲ばせる吉野の姫君に執着すればするほど、心清く澄まさなければならぬ尼君の極楽往生

はますます遠のくばかりである。一刻も早く姫君の身を安心して託せる「たづき」を求め、俗事に心乱されることなく仏道の世界に埋没したいのだ。

この人のよるべありぬべかめりと、心やすく思ひをくべきことのはしを出でさせせて、おもひなく、のちの思をだにも叶へ給へと、この三年ばかりは、まづこの御いのりをのみ先に立て、念じ給ふ、（巻三・二八三）

尼君は、せめて姫君の「よるべ」（たづき）の手がかりなりともあってほしいと、この三年ばかりは一途にその出現を願って仏に祈っていたという。我が往生をもちえりみない祈念に仏も感じたのか、夢に僧があらわれ出て、中納言が姫君の「たづき」であることを告げるのである。唐后は幼くして母君と別れたものの、その思慕の情は年とともに強まる一方で、中納言に託した文の中でも、「この世の後の位も、身にはすべて益なふ覚え侍。たゞ身を代へても、おはしますらん同じ世の木草ともならまほしうのみ侍れば、命もつゆおしうも侍らず」というほどの激しさであった。しかし、異世界の人間であってみればそれもかなわなかったため、日本の男と契らせて心深く思わせ、その愛する女性（唐后）のゆかりのもの（吉野の姫君）の世話をさせようとはかっていたところ、折しも「たづき」を求めて祈る尼君の心とも合致したのだという。一体誰がそのように背後で仕組んだのか。いうまでもなく仏であり、その力のもとに中納言は課せられた運命を歩んでいたのだ。中納言の渡唐は、めぐりめぐって吉野の姫君の「たづき」の役割を荷う一階梯でもあったという、一つに結びあわされた宿命の糸は、どこまでもたぐり寄せることができるのである。⁶⁾

中納言は、吉野の姫君に思いを寄せ、そのまま進めば当然二人の結婚も予想されることであった。だが、それは物語の表面に示された展開であって、作者の中納言の運命を操る意図は、尼君の夢に「物思ひの切なるゆへに、あつかはせん」と僧が語っているように、姫君の世話役に終始することであり、ここでも恋の成就し得ないむなしさを語ることにあった。尼君は、姫君の「たづき」を求め続けた念願がなかったからこそ、紫雲のたなびくという望み通りの

往生ができたのである。人にも知られないでひっそりと暮らす美しい姫君、その女性を都に連れ出す橋渡しの役割を、中納言ははじめから賦与されていたのだ。薫が宇治の姫君たちを都の物語舞台に引き出したのと、まさに軌を一にするであろう。

中納言は吉野の姫君に唐後の面影を見、やがて形代の地位から、大君（尼姫君）・唐后にも劣らない女性であることが強調され、二人の結びつきは必至の方向へと状況はおし進められていく。その行く手を阻んだのは、またもや突如として宣告される理不尽な姫君の宿世であった。聖は、吉野の姫君を都に引き取ろうとする中納言に向かって、

廿がうちに世を知らせ給はゞ、わが身破られ給べき宿世のおはするなん、いとおそろしう侍るべき。このごろ

も、この事とぎまかうぎまに見給ふるに、廿がうちににんじ給はゞ、すぐしとをしがたうおはします人と見え給

こそ、いとたいくしけれ。今年十七歳にやならせ給ふらん、今三年は猶つゝしみ給ふらんや、善からん。（巻

四・三五八）

と、すくなくともここ三年は契りのあつてはならないこと、もしそれが破られるようなことがあれば、「いとおそろし」い身の破滅に繋がることを申し渡すのである。これによって、吉野の姫君は中納言の手もとから式部卿宮の略奪という方法によって、離れて行く運命に遭遇するのだ。

あれほどおごそかになされた聖の予言にもかかわらず、姫君は本意ながら式部卿宮と逢ってしまった。その結果、彼女は「水の泡などのやうに消（え）い」らなばかりの死の危険にさらされ、中納言もすぐさま「ひじり（聖）のすくゑう（宿曜）」を思い浮かべ、不吉な予感に捉われずにはいられなかった。しかし、姫君の死への彷徨は、聖の予言とは無関係で、「たづき」としての中納言を「ひとへにあはれにいみじう思ひ」（巻四・四〇七）出している湯水をも口にしない煩悶であつて、彼の看護とともにその病いも快方に向かうことにより原因は明らかであろう。聖の宿曜

による判断は当然なかつたのだ。「廿がうちに世を知らせ給はゞ、わが身破られ給ふべき宿世」というのは、中納言と姫君の結びつきを避けるための方便にしかすぎなく、その後の物語の内容に深刻な影響を与えないのは、唐后で見た付加的な運命の出現と一向に交りない。

中納言は、吉野の姫君と結婚するわけにはいかなかった。唐后とオーバーラップしてしまった姫君と契ることは、彼の脳裏に刻まれた思慕の情が埋没し、もはやあこがれの対象ではなくなってしまう。恋慕を継続すること、その渴仰が唐后の転生を導くにいたるのだ。作者の定めた命題のもとに、果てしなく追い求めることが、中納言に賦与された存在のあかしでもあったと言えよう。彼はここ数年のわが波乱の生活をふり返り、「かくもろこしにても此世にても、このひとつゆかりにかうのみいみじく心をみだり歎わぶべき契り」(巻五・三九五)のあったことを述懐する。まさに「心をみだり歎わぶ」という運命の星のもとに彼は渡唐させられ、唐后・吉野の姫君とうつろな悲しみを味わわなければならなかつたのだ。

源氏物語の作者は、書き進めることによって新しい物語の方法を獲得していったと言われる。寝覚物語の中君にしても、巻を追うごとに成長し、新しい人間像に変貌していったことは、作者もともに歩んだことを示しているであろう。だが、浜松中納言物語の場合は、強い主題性が先行し、その枠組みのもとにすべての人物を動かしていくという方法をとる。人物の思考による内発的な物語の展開ではなく、作者の定めた物語の骨格のもとに押し込められ、他律的な行動をするしか彼等にはその範囲が許されていないのだ。次々ともたらされる付加的な運命によって、規定の物語のルールをただ走らされるにすぎない。

無名草子では、中納言を評して「薰大将のたぐい」と正鶴を得た発言をしているが、まさに彼は薰の桎梏から抜け出ることはできなかった。だが、当時の物語の状況からみて、源氏物語とは全く価値を異にする、新しい物語を創造

せよといっても、それは求める方が無理であるし、まず不可能でもあった。源氏物語以後の作者たちの、その繫縛から抜け出ようとする試みは、もっぱら物語の展開に強い関心を示し、その行き着く先は筋を追い求める創作方法となるのはいたしかたのないこととも言えよう。それもやがて枯渇すると、院政期から鎌倉期にかけての物語のように、物語がパターン化していく運命をたどっていくのだ。¹⁷⁾

薫は宇治の地でひっそりと暮す大君・中君を物語の主流の舞台に乗せながら、いずれとも添うことができず、形代として心の安らぎを求めようとした浮舟すらも、出家という最後の手段により、俗世を離脱して彼のもとから去ってしまった。その薫の女性故に分離の心をも失なって翻弄される姿を、浜松の中納言は、宿世として荷わされてしまっているのだ。作者は宇治十帖の構図をそのまま用い、大君・浮舟の運命を、尼姫君・唐后の二人に、中君を吉野の姫君にそれぞれ比擬し、その重くのしかかる梓組の中で、転生思想を導入させた新しい物語の創造に立ち向かった。これが作者の苦悶した物語の方法であり、また平安末期の作品に共通する限界でもあった。中納言、式部卿宮との絡みあいによる吉野の姫君の生き方は、薫・匂宮・中君の三者を思わせるが、そこには一挿話として吸収されているのではなく、一つのまとまった物語が形成されている。三者の恋の争奪だけを独立させても、充分物語として存在するに足り得る内容を持つと言えよう。やがてこの恋物語の構図が、その後の作者たちに圧倒的に受け入れられ、繰り返し同じ趣向の物語の生産が続けられていくのである。

註

(1) 『校本浜松中納言物語』（小松茂美著）によると、京都大学文学部本（小山文庫旧蔵）には「十七八ばかりにて」と見えるが、他本はすべて「七八ばかり」とある。

(2) 式部卿宮の薨去した折の中納言の年齢について、松尾聰博士は「十四、五歳に達せぬうちのことであろう」（古典文学大

系本解説」とされる。

- (3) 「浜松中納言物語鬮巻の構想到いて」〔古代小説史稿〕昭和三十三年、刀江書院刊所収）
- (4) 拙稿「浜松中納言物語散佚部分の構想」〔中古文学〕第四号、昭和四十四年十一月）
- (5) 「浜松中納言物語の構想をめぐりて」〔鶴見女子大学紀要日本文学〕第八号、一九七〇年）
- (6) 中納言と吉野の姫君については、拙稿「吉野の姫君の運命」〔愛媛国文と教育〕第三号、昭和四十六年六月）がある。
- (7) 物語のパターン化する方法については、拙稿「いはでしのぶ物語構想論―伏見宮の姫君たちの運命をめぐって―」〔日本文学〕一九七六年五月）で述べたことがある。